

歌壇俳壇



〈日曜日のプローチ 36〉 junaida

短歌時評 子規の魂を引き写す

山崎 聡子

紀貫之は下手な歌人であって、『古今和歌集』はくだらないアンソロジーである。明治31年に発表され、近代短歌の礎となった正岡子規の伝説的歌論「歌よみに与る書」の現代語訳が発売された。手がけたのは口語短歌の旗手・永井祐。「現代語訳」と言うが、原文はいわゆる「候文」で書かれており、永井訳は意訳に近い。しかし、ときにラフで口語的な永井訳は、死のたつた四年前、すでに病床にあった三十歳の子規の溘る魂をそのまま引き写すことに成功している。勅撰和歌集を批判し、有名歌人の歌をこき下ろすなど、ほとんどが伝統的短歌の否定から成る本論だが、子規の主張は終始クリアで一貫している。形骸化した言葉で歌を詠まないこと。理屈に落ちないこと。陳腐な嘘を吐かないこと。短歌の調を唯一視せず、多様な調を用いること。永井による解説に子規の論の一種異様な熱量をネット上の怪文書に喩えるくだりがあるが、子規の主張は現代も形を変えて短歌の批評空間に存在する言説と通じる。

現代語訳によって鮮明になったのは、時代を超えて人を揺さ立てる子規の言葉の魅力であり、賛否にかかわらず、これに揺さ立てられた人々の連なりによって短歌や俳句が生き延びてきたという事実だろう。

今年が高良真実による近代歌人のアンソロジー『みんなの近代短歌』も出版された。明治後期以降の十五歌人の歌が収録されており、手厚い解説やブックガイドも親切だ。どちらも、近代歌人の息づかいが感じられる良書といえる。(歌)

角谷昌子著「俳句の水脈を探る 平成・令和に逝った俳人たち」 俳人による評論集。阿波野青畝、加藤秋郎、深見けん二、有馬朗人、稲畑汀子、黒田杏子、鷹羽狩行ら37人の俳人の生涯を紹介するとともに、作品の数々を鑑賞し、論考を加えた。故人に師事した俳人や関係者にもインタビュー取材して、多面的な構成にした。(ふらんす堂・3080円)

風信

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

大串 章選

木守柿子規も驚く高さかな (高岡市) 野尻 徹治  
この旅の最期は一人小春かな (岡山市) 沖 直保  
老老が朗朗となる小春かな (水戸市) 加藤木よういち  
枯野ゆく吾が晩年の安らぎに (高松市) 信里由美子  
近道のなき人生の年惜しむ (福島県伊達市) 佐藤 茂  
短冊に今年の一句年惜しむ (橈原市) 井内 温雄  
うつくしき記憶をつなぎ返り花 (輪島市) 國田 欽也  
冬景色とは灰色に輝ける (静岡市) 松村 史基  
学生を連れだす教師おでん酒 (京都市) 室 達朗  
公園の落葉に座りカフカ読む (小平市) 野口 佐裕

【評】第1句。「子規も驚く」なるほど。子規には「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」など柿の佳句が多い。第2句。「この旅」は人生の旅。人はみな最期は一人で天国へ旅立つ。第3句。同音異義語の取合せが見事。明るく余生を過ごしましょう。

高山れおな選

あつあつと海馬いなく年忘れ (東京都練馬区) 吉竹 純  
一夜さを魔界のとき虎落雷 (神戸市) 小柴 智子  
透明な人透明に着膨れて (霧島市) 秋野 三歩  
霜夜には月のはくくむ霜を聴く (札幌市) 岡崎 実  
鬼胡桃割ればハートが向き合へり (川崎市) 吉川 清子  
綿虫の唄はいづこ知らずおく (川崎市) 大野有之介  
鍵穴の冬至ちかつく暗さかな (鹿嶋市) 大熊佳世子  
米と熊と北の戦や年つまる (本巢市) 清水 宏晏  
皇帝タリア咲けば九州場所がある (下関市) 野崎 薫  
しるるるるや存立危機は歩き出し (埼玉県鳩山町) 荻原 久

【評】吉竹さん。海馬は記憶などを司る脳の部位。一年間の恥の記憶に思わずうめき声が漏れる。小柴さん。一夜さは一晚中。「魔界のとき」の比喩が端的だ。秋野さん。「透明な人」は親しい故人か。思い出のその人と共に冬本番を迎える。

小林 貴子選

わかりやすく落ち込む妻の玉子酒 (さいたま市) 與語幸之助  
咳漱し脳内サイケデリック調 (沼津市) 石川 義倫  
寝たきりの父に歯向かひ冬夕焼 (日立市) 川越 文鳥  
身に入むや句会句友も思い出に (幸手市) 藤井 順子  
熊手とは肩に食い込む縁起なり (ふじみ野市) 麻生結希子  
引算に切り替へ処する師走かな (大阪市) 上西左大信  
外套の裾広がりがて彼は鳥 (京都市) 山岡 俊介  
銀ぶらや白きセーター眩くて (東京都世田谷区) 須藤 渉一  
着ぶくれて脱がせてもらっ診察室 (横浜市) 橋 秀文  
突如水尾乱れて鴨の引き返す (東かがわ市) 桑島 正樹

【評】一句目、わかりやすく慰めてあげてください。二句目、腋の裏に激しい色のモザイクが渦巻いたりする。三句目、いつになっても親子関係はそんなにうまく運ばない。四句目、句会に出られなくなったとしても思い出を胸に作句を続けて。

長谷川 權選

ふるやの山こたへく雪の山 (長野市) 縣 展子  
アザミ焚くスコットランド宛狩り (東京都世田谷区) 松木 長勝  
疲れたる身を振り返る十二月 (矢板市) 菊地 壽一  
白鳥の中州は恋を歌ふ場所 (横浜市) 菅沼 葉二  
人生はさすらひの旅雪の宿 (新宮市) 中西 洋  
かくはしき太陽の香や大根畑 (石川県能登町) 瀧上 裕幸  
わたくしを知つてゐるのか雪女 (葛城市) 山本 栄子  
福島の止まったままの寒さかな (福島県伊達市) 佐藤 茂  
千し籠に魚並べて日向ぼ (いわき市) 中田 昇  
文鳥の雛を賜る聖夜かな (日立市) 川越 文鳥

【評】一席。思いをこめて描く故郷の山々。いよいよ深みをまして。二席。枯れたアザミの草原がよみがえる。スコットランドの花。三席。自分自身を振り返るのだ。前へ進むために。十句目。贈りものか、卵がかえったのか。作者の名も文鳥。